

保育士養成校における親子講座での学生の実践的学び

永津利衣

愛知みずほ大学（非常勤講師）

Rie NAGATSU

Aichi Mizuho College

キーワード: 親子講座; 表現遊び; 保育士養成.

Keyword: course for parents and children; play with expression; training course of nursery teachers.

1. はじめに

地域貢献活動の一環として行われた親子講座において、保育士養成課程2年の学生が、遊びの要素を取り入れた企画・実施を行った。本論では、実施後に学生によって書かれた自由記述から、学生の気付きなどをまとめた。加えて、保護者アンケートの結果より、保護者の視点から学生の行動をとらえた。それらを基に、親子講座の実践を通して、保育者¹⁾を目指す学生の学びや課題について考えた。

2. 親子講座の概要

期日: 201X年7月15日 午前10時から11時30分

場所: A短大体育室

参加者: 地域の年少、年中、年長の子どもの保護者30組

内容: 「“にんじゃ”にへんし〜ん」というテーマで、忍者の修業を題材にした次の2つの遊びを設定した。活動内容は教員の助言を受けながら、学生が考案し準備した。

・「変身の術」と呼ばれる動物の模倣遊びでは、学生はヘビ、ライオン、鶏などの大きな絵カードを見せ、身体の動きと、その動物にふさわしい楽器の音を提示した。保護者も子どもと一緒に行ってもらった。

・「修行サーキット（以下サーキット）」では、家庭でできないダイナミックな動きをねらった。体育室全体を使って、綱くぐり、一本橋、ボール投げ、新聞破りの各コーナーを、子どもだけで順番にこなして回るように計画した。各コーナーに子どもの誘導・補助をする係の学生が就いた。

学生の活動: 学生は5名程度のグループで、上記のように企画と準備、練習、本番の進行を担当した他、子どもおよび学生の衣裳の用意、当日の受付や誘導案内、開始前の遊びコーナー（絵本の読み聞かせ、手遊び歌など）の係も重複して行った。なお、準備・練習は全員で行ったが、当日は幼稚園教育実習のため18名のみが参加し、そのうち数名が前年度にスタッフとして参加経験があった。

3. 結果と考察

ここでは、自由記述および保護者アンケートのそれぞれの結果と考察を述べる。

3-1 自由記述

実施当日に参加した18名の学生のうち、15名から自由記述が提出された。その内容をまとめたところ、子どもへの関わり、学生の言葉掛け、本番と練習、初参加と緊張、の4項目に分けることができた。文中の

「」は学生の記述の引用で、その中の（）は筆者が補足などを加えたものである。

なお、倫理的配慮として、学生には研究への資料提供において、個人情報の保護や成績への影響がないことを説明し、全員から同意を得た。

(1) 子どもへの関わり

ア. 観察された子どもの様子と、それに対する学生の考えや対応

さまざまな活動において「一生懸命」「嬉しそうに」遊ぶ子どもの様子に目を向けた記述が多くみられた。また、学生によるさまざまな子どもへの言葉掛けや関わり行動が述べられ、学生が子どもに寄り添おうとしたことがうかがえた。

特に記述が多かったのが、「変身の術」における子どもの表現であった。「予想される動き」として学生が準備した手本ではなく、子どもたちは「寝転がって体をくたくたにやさせ」て「へビ」に変身しており、「思いもよらない動きをした」ことが述べられていた。それに対し、「子どものもつ想像力」への感動や、子どもたちの動きに即興で合わせられたことが述べられていた。一方、「ライオン」の変身では「四つ這い」や「ゆっくり動」いて「ライオンになりきる子ども」がいたが、数名の学生は子どもの動きを「取り入れきれなかった」とも述べていた。「(計画で) ありとあらゆることを予想しなければいけない」、柔軟な対応が「自然とできるようにになりたい」という省察がみられた。学生には「その場で子どもたちの表現を大切にしたい」という思いがあるものの、予想外の新規の表現パターンへの即応が容易でなかったことが推測された。

「泣いてしまった子ども」に対して「一緒にやってみようかと言葉掛けをしながら一緒にゴールまで走ったり」、「褒めたり応援したり」したことが述べられていた。「学生が寄り添い」、子どもが気持ちを立て直していけるように促したことがうかがえた。「(障害をもつ子どもが) 橋の上を歩くのが大変そうだったので、(略) 気にかけてながら次の(略) 所まで付き添った」では、子どもが苦手な課題を達成するまで支えようとしたことがうかがえた。この障害について「以前何かの授業で見たDVDで」学んでおり、この講座が学習を実体験する機会となった。また、聴覚の障害をもつ子どもには「体にタッチするなどして頑張れと伝えた」というように、子どもに伝わりやすい身体的なアプローチを考えて実行されていた。

その他に「動き回る子ども」「緊張している子ども」「保護者から離れられない子ども」といった多様な子どもの様子が観察されていた。

保護者のいる状況において「(子どもの) 近くに行き、一緒にやることができたのでよかった」とする記述と、

「保護者がいたため、実習のように子どもと深く関わることができなかった」とする記述がみられた。また、親子間の様子について「保護者と一緒に(略) 楽しんでいる」「動き回る子どもの保護者は(略) じっとしてほしいと思っていたように感じた」という観察もみられた。学生にとって保護者の存在は大きく、緊張や関わりづらさもあるが、保護者への支援は保育者の任務の1つである(厚生労働省, 2018)。それぞれの学生に対応力の差はみられるが、保育現場を想像する「よい経験になった」ことがうかがえた。

イ. 自己評価

「今回自分たちが中心となって準備や本番の進行を進めた」という自負が述べられていた。これに加えて「子どもたちは楽しんで遊びに取り組んでいた」という様子から、「自分たちの力で進めた」成果を感じ取られ、達成感を得たことが推測された。

また、子どもへの「積極的」な関わりや「臨機応変」な対応、「言葉掛けのレパートリー」の増加ができたという自覚から、「実習経験」が生かされていたと感じる記述もみられた。

「子どもたちとの関わりは自分ではできたと思う」「自分なりに周りを見て行動した」などの肯定的な評価と、「少し消極的になっていた」「自分の仕事を探し素早く行動に移すことができなかった」という否定的な評価がみられた。否定的な評価の直後に「活動自体は子どもたちも楽しそうにしてくれていたし、自分自身も楽しく参加することができたのでよかった」とする感想があり、イベントの楽しさによって省察が曖昧になる可能性も考えられた。

(2) 学生の言葉掛け

ア. 子どもへの言葉掛け

実習による成果を感じながら、活動中に学生が行った言葉掛けが具体的に述べられていた。また、「大きな動作や大きな声で」「ゆっくりわかりやすい内容で」「自分から子どもたちの目線に合わせ」など、言葉掛けにおける声量、話す速さ、言葉の吟味、動作の付随、目線の配慮がなされていた。一方、子どもに遊び方が伝わらず「大変だった」とする記述もみられた。

イ. 言葉掛けに関する自己評価

言葉掛けについて「すればよかった」「できるようにになりたい」と述べた3名中2名は、その文の前後で子どもとうまく関わったことを述べており、より向上を望む振り返りと考えることができるであろう。その他に、「仲間の(略) 言葉掛けから学ぶことがたくさんあった」、進行をうまく進められず「他の学生の言葉掛け(略) に助けられた」とあり、言葉掛けにおいて学生同士の学び合いや助け合いが行われた。

このように言葉掛けについていくつかの角度から多

くの記述がなされており、学生にとって言葉掛けは、初めて会う子どもと関わるための重要なツールであったと考えられる。しかし、中には言葉掛けが容易でなかった学生もあり、対応力に差がみられた。

(3)本番と練習

ア. 事前準備

「(活動を)自分たちで(略)考えるのは大変だった」としながらも「子どもたちが楽しめる」ように「考えた」ことが述べられていた。特に、変身の術における動物の模倣の考案では、「自分たちでどんな楽器を使うかや、どのようにしたらよりよいかなどを考えるのは大変だった」。実際、楽器の選択や音作りは教員が助言したが、その際、学生が自己決定できることが大切であろう。

イ. 本番

「本番」で対応できたことや、うまくできなかったことが述べられていた。「サーキット」担当の学生が困惑し、詳細に時間配分や担当者を「決めておくとよかった」とする一方、「人が足りないと気付いて」別の係のサポートに回る臨機応変な対応も述べられていた。

ウ. 仲間との協力

「事前準備」において「仲間と協力」して話し合い、仲間からの学びがあったこと、協力により「成功」できたこと、という肯定的な内容が述べられていた。

エ. 伝え方

「かしこまった話し方」や「早口」など「練習ではうまく話すことも、表現することも思ったようにできなかった」という反省が「本番」に生かされ、「ゆっくりわかりやすく」「より大きな声で話す(略)ように気をつけることができた」「子どもたちを見ながら説明できた」など、「自分が思ったように表現することができた」と述べられており、本番での改善がうかがえた。

(4)初参加と緊張

「初めての参加でとても緊張」していた学生がいた一方で、初めて来た場所で「初めて会う学生」に子どもも「緊張していた」様子が述べられていた。そのような子どもに「笑顔で話すこと」や「一緒に体を動かす」ことで受容的な雰囲気を作り、子どもの緊張を解こうとしたことがうかがえた。

また、「初めて」学生中心の企画・実施が述べられた中に、「いろいろな準備不足で自分的には成功とは言えない」という否定的な意見もわずかにみられた。しかし、実際に行うことで実感できた準備不足であり、経験から学ぶチャンスといえる。

3-2. 保護者アンケート

19名の保護者からアンケートを回収した(一部の回答に空欄のあるものも含む)。

質問1：学生の説明はわかりやすかったですか。

回答は、「わかりやすい」「どちらかというわかりやすい」「どちらかというわかりにくい」「わかりにくい」の4件法でたずねた。その結果、図1に示したように、回答者の全員から「どちらかというわかりやすい」「わかりやすい」という肯定的な回答が得られた。

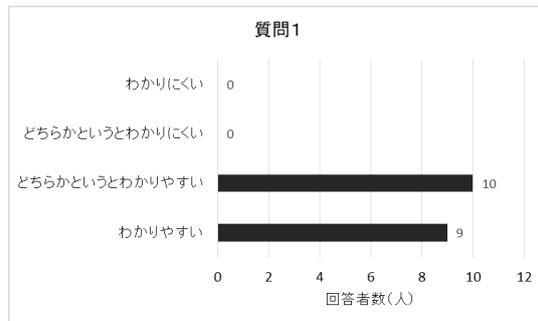


図1 学生の説明についての質問

質問2：学生はお子さんと関わるできていましたか。

回答は、「関わっていた」「どちらかという関わっていた」「どちらでもない」「どちらかという関わっていない」「関わっていない」の5件法でたずねた。その結果、図2に示したように、1名が「どちらでもない」と答えた以外、「どちらかというとかかわっていた」「かかわっていた」という肯定的な回答が得られた。

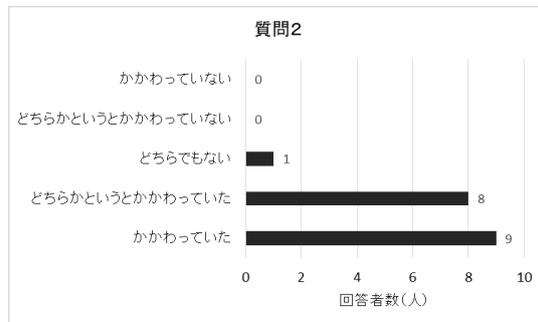


図2 学生の関わりについての質問

質問3：学生の態度、様子などお気づきの点を教えてください。

14件の記述が得られた。表1はその中の抜粋である。学生が笑顔で、丁寧に一生懸命に子どもに接しようとする姿を評価し、子どもが楽しんでいたとする肯定的な内容が11件でみられた。反対に、学生が恥ずかしそうにしていることを指摘する意見が4件あった。中には学生の努力を認めつつ、指摘をするものもあった。

表 1 質問3の回答より抜粋

- ・みんな楽しく笑顔でいてくれたので、子どもたちもすぐに打ちとけて参加できました。下の子は恥ずかしがり屋で、一人でできなかったのが、お姉さんに手をつないでもらい、できるようになりました。
- ・台本通りに行かなくても思い切ってやればよい。
- ・子どもたちとの関わり合いは恥ずかしいと思いますが、もう少しちょっとしたことで声掛けがあればよかったと思いました。

質問4：公開講座の感想をお書きください。

13件の記述が得られた。表2のような肯定的な言葉が目立ち、記述中に今後の参加希望が3件、継続希望が8件みられた。学生が子どもに丁寧に寄り添うことで、子どもは安心して楽しく参加することができ、その子どもの姿を見ることで、保護者の好印象を生んだと推測される。

表 2 質問4の回答より抜粋

手作り感満載で温かいイベント、貴重な機会、
こういう遊びを増やしてほしい、終始大満足の
講座、年齢を問わず楽しめる企画

4. まとめ

自由記述の内容をまとめると、以下のような学生の姿が浮かび上がった。

子どもと直接接することを通して、さまざまな子どもの様子が目に向けられており、それぞれの子どもにに応じて対応が考えられ、そして行動がとられていた。学生は緊張しながらも笑顔で心掛け、子どもと一緒に動くなど、受容的な雰囲気を作って子どもに寄り添おうとしていた。子どもが気持ちを立て直し、苦手な課題ができるまで見守ったその根底には、子どもの心の動きを受容し、共感しようとする保育者としての姿勢が育っていたといえよう。また、言葉掛けや説明といった話すことに関しては、目線に配慮し、大きくゆっくりして、子どもにわかりやすく伝えようと努めていた。また、練習での学びを活かそうする姿勢もみられた。つまり、本活動は保育者となるに向け、自分自身の成長を確認する機会となった。

しかし、上記の様子はすべての学生にみられたものではない。子どもへの関わりや係の運営において、対応力や臨機応変さ、積極性などには個人差があった。このような活動の大きなメリットは、実践を通して他の学生の考えや行動を互いに学び合うことや、壁にぶつかりながら自ら課題を発見していくことである。学生

が達成感を感じる中で、学び合いや課題発見をいかに推し進め、個人差をうめていくかが今後の課題である。

次に、企画の力をつけることが挙げられる。活動を考案する段階で、学生たちは子どもたちが楽しめるように、子どもの動きを予想しながら遊びを考えた。忍者の服装や活動に必要な道具など、何をいつまでにどれだけ用意しなければならないのか、先を考えて計画し行動することも必要であった。実際には、学生だけでは進まないこともあったが、指導・助言を受けながら実践的体験に移していく中で体験的に学ぶことが重要である。このような企画や実践の経験は、保育現場での運動会や生活発表会のような行事の運営にも役立っていくであろう。

保護者アンケートの結果では、学生には恥ずかしさなどの未熟さがあるものの、一生懸命取り組み、子どもに真摯に向かおうとする利他的な態度が、第三者から評価されたといえよう。

最後に、学生の表現に関する課題についてまとめた。企画の段階で、身体表現、言葉で伝える表現、楽器の音による表現などによって表現遊びを考案することは「大変だった」と述べられており、試行錯誤する様子がうかがえた。また、本番では「ヘビ」や「ライオン」の変身で、思いもよらない子どもの柔軟な表現を目のあたりにし、子どもに合わせて動きたいが動けない学生の葛藤が見出された。つまり、学生には子どもに寄り添おうとする保育者としての基本的な態度は養われているものの、表現の具体化に課題があることが明らかになった。特に、音という抽象的な方法によってイメージを表すには、学生自身が楽器で遊び込み、多様な音をある程度自在に鳴らすことができる技能の習得が必要である。同時に、イメージを固定化せず、豊かに広げていく想像の力も不可欠である。身体の動きによる表現技能も含め、表現の自由度を高める指導法の検討が今後の課題といえる。

1) 保育者とは、保育士、幼稚園教諭、保育教諭などを指す。

引用文献

厚生労働省(2018):保育所保育指針解説 第4章 子育て支援、329-340.

付記

本稿は平成30年度日本音楽教育学会第49回岡山大会においてポスター発表した一部を修正・加筆したものである。

本論は、2019年度愛知みずほ大学研究倫理審査委員会の承認を受けている。